

辺野古のキュンプシュワブゲート前では、現地への激励と代表者のあいさつ後、参加者全員で座り込みました。途中で座り込み中に、現地の方からの経過説明や闘いの歌など、あるいは抗議行動として、ゲート前でミニデモ、シュプレヒコール等を行いました。

カンパや南大阪のボールペンを手渡し、約1時間半の行動の後、辺野古海岸へ向かいました。海岸のテント村では、工事が中断していることもあって、人影はまばらでしたが、現地常駐者からの報告を受け、カンパを渡し、初日の日程を終了しました。

あまりに広大な嘉手納

翌28日、最初に「道の駅・嘉手納」に行きました。ここは、屋上の展望台から米軍嘉手納基地が一望できる場所です。違憲共闘会議議長の有銘政夫さんから、沖縄県での基地配置や米軍基地がなぜ沖縄県に集中しているかの説明を受けました。この最中にも数機の米軍戦闘機が離発着していました。

ガマでの事実

次に読谷村のチビチリガマへ。現地では知花さんが出迎えてくれました。知花さんは71年前、ガマの中で何が起こったかを話されました。沖縄戦の最激戦地だった南部地区では、住民が集団自決を図ったとされていますが、その背景には、日本軍が住民たちに「米兵は鬼畜」、「女性は捕虜になるとレイプされ、男性は虐待されて殺される」との徹底的な軍事教育がありました。

全員でチビチリガマへ入りました。遺族らによる遺骨の収集・納

骨が終わっていることもあって、随分と片付いていましたが、それでも遺骨や薬品等のビン、生活用品の一部が散乱しており、当時の悲惨さが伝わってきました。このときに聴いた話を文章化するには、私自身に抵抗感がありますので、これ以上は省略致します。



病院とはいえない施設

沖縄陸軍病院南風原壕群20号（南風原町立南風原文化センター）でも、壕の中へも入りました。現地のガイドさんより説明を受けながら、当時の壕の中の施設の位置であるとか、怪我人の手当の様子などの説明がありました。南風原文化センターでは当時の映像や資料を見学しました。その後、読谷村役場に立ち寄り、米軍基地内に読谷村役場を建設した経緯や基地返還の経過の説明を受けました。

午後から喜数高地へ向かいました。展望台からは米軍普天間基地を見渡せ、オスプレイが6機が駐機されていました。そこから米軍ヘリが墜落した沖縄国際大学を視察しましたが、校舎は完全に修復されており、墜落したと思われる

地点の樹木だけが、当時の記憶として残っているだけでした。

最終日の29日(日)、ひめゆりの塔の視察と資料館、最後に、平和祈念資料館内の、「平和の礎」を前に、何万と言う遺影、沖縄戦では、日本軍兵士より沖縄県民が多く亡くなっているとの報告を受け、日本軍・国は、沖縄県民を守ることすら行わなかった。悲惨な戦争の爪跡を見ることになりました。

今回、「過去・現在・未来」を同時に体験し、過去の悲惨な戦争と現在の状況、沖縄県の軍事基地化が進む中、沖縄県の未来を大変危惧しました。しかし、戦争を進めるのも人間です、止めるのも人間です。

地位協定の存在

米軍基地が在ることによって、事件・事故が多発しています。しかし、米兵は罪も問われず本国へ帰っていきます。このような理不尽な行動が続き、日本政府も容認しています。犯罪者を裁けない、日本の司法機関はどうなっているのか、ますます事故・事件が多発する要因ともなっています。こう言った問題を危惧していることから、わたしたちは「日本から米軍基地を全て撤去させる」は、当然の流れではないでしょうか。バス移動の間、ガイドさんや、コーディネーターの方から沖縄戦争当時の話を聞かせてもらい、現地でしか知ることのできない経験や、71年前にタイムスリップしたかの貴重な体験でした。機会があれば、ぜひもう一度参加したいと思いながら、那覇空港を飛び立ちました。



第299号 2016年6月16日

発行
大阪市港区築港1-12-27
全日本港湾労働組合関西地方大阪支部
発行責任者 林 繁 行



スミサク分会の16春闘は、賃上げより制度要求に軸を置いた春闘だった。

形式的団交に終始

港湾事業者でありながら港の秩序を乱し続けてきた会社は、人道無視の弁護士指導の下、当初から形式的団交を繰り返すという不誠実な態度に出た。しかも、これにとどまらず、港運同盟を優位に位置づけて全港湾を差別的に扱い、港運同盟の顔色を見ながら不誠実な回答を続けるというふざけた態度だった。この結果、4月25日の地本統一集団交渉も決裂した。翌26日、支部・分会はストライキを背景に始業時から団交を行い、会社から「担当部長の進退をかけた、前進ある回答を、明日・27日に提示する」との確認を取り付け、一旦、ストは回避した。

内容がすりかわる

翌日の会社回答を、組合側は一定、前進あるものと評価し、とりあえず口頭にて合意の意思表示を

行った。ところが、あろうことが、協定化の段階で合意内容がすり変わっていた！

その後の5.24団交で、組合は強く抗議したが、会社は、一歩も引かないという強硬な態度で、結局、決裂となった。

ストに突入

支部・分会は、こんなふざけた態度を許すことができず、ストで闘う方針を決定した。

決行日を30日と設定し、前段の26日に街宣を行い、当日を迎えた。始業時の午前8時にスト通告を行った後、事務所前にて全員が怒りを込めたシュプレヒコールを行い、ストに突入した。

この結果、会社は団交開催を申し入れてきた。

午後2時半からの団交は、組合側は支部役員と分会員全員が出席し、会社側は担当者が出席した。しかし、肝心の回答は、わずかばかりの前進しか見られないものだったため、組合が4項目の逆提案を行い、これへの回答期限を6月1日として、15時にストを解除した。

6月1日の回答は100%満足できるものではなかったが、今次ストを労使関係の正常化に繋げることを確認しあって妥結した。

〔文・スミサク分会〕

今後の課題として

昨今、労働組合のスト実施が激減している。円満な労使関係が続くことで戦闘性を失い、ストに自信を持てなくなっているように感じられる。

労使関係が安定していることは悪いことではないが、何らかの事情で会社の組合政策が対決型に変わることは常にあり得る。会社から、団交拒否なども含め、本格的に攻撃を受けた場合、これを打ち破る行動ができるか否かは、日頃の学習と実践で培われる。

不当労働行為にはすかさず抗議し、なお、続く場合には、残業拒否など、創意工夫した戦術を駆使して、組合側のペースで闘いを進めることが肝要である

今一度、闘う感性を磨かなければならない。

〔文・担当執行部〕

特集 2016沖縄

青年部平和行進

はじめての沖縄で、気持ちの変化を感じた

青年部 副部長 横山 貴安基

5月12日～16日の5日間、大阪支部青年部の2名で沖縄平和行進に参加しました。

飛行機が那覇空港に着陸する際、民間機と隣り合わせて自衛隊機が多数並んでいるという、初めて見る光景に驚き、これが沖縄の現状かと衝撃を受けました。

午後3時から『5・15平和行進全国結団式』が行われましたが、今、沖縄で懸命に闘っている人たちの熱い発言を聴いて、自分も平和行進に参加するんだという実感が湧いてきました。

あまりに理不尽な・・・

その後は、ホテルで三単産と全造船による結団式が行われました。平和学習会として、マスコミ労協議長・与儀武秀氏より「沖縄/基地問題を考えるために」との講演がありました。

大きくは3つのテーマで、1. 沖縄の基地の歴史、2. 辺野古新基地問題、3. 沖縄の基地と抑止力についてでした。私は、何故に基地が沖縄に集中するのか、軍事的には沖縄でなくてもいいが、政治的に考えると沖縄が最適の地域だということを知り、それはあまりにも理不尽であると感じました。与儀さんの講演を聴いて、自分の中で沖縄に対する観方が変わっていくことを感じられた、有意義な学習でした。

平和行進出発

翌13日午前9時から、南城市陸上競技場で出発式が行われ、平和行進がスタートしました。開始後30分も経たないうちに、右翼の妨害宣伝が繰り返されましたが、参加者全員によるシュプレヒコールで毅然と対応しました。



この日は距離も16kmと長く、途中の右翼の妨害もあって時間が押して、目的地のひめゆりの塔に到着したときには、夕闇が迫っていました。この時には脚が痛んで、まだ2日間もあるのかとしんどい気持ちになりました。

追悼の心、胸に

14日は午前と午後で、行進と視察の2班に分かれました。

私は午前に行進しました。糸満市役所を出発して、市内の丘を登り下りしながら、目的地の東風平運動公園陸上競技場を目指しまし

た。糸満市は、多くの犠牲者が出た沖縄戦最後の激戦地で、シュプレヒコールを控えて追悼の意を表し、「静かなる行進」をしました。

前途ある学生が犠牲

午後からは平和祈念資料館とひめゆりの塔を視察しました。

平和祈念資料館には、激戦当時の写真や、軍隊が使用した物などが展示されており、見て恐怖さえ覚えました。

ひめゆりの塔では、ひめゆり学徒隊と教師227名の遺影が壁に掛けられていました。現代に生きる私たちは、戦争もなく、学生時代には様々なものに興味を持つことができ、希望に満ちた暮らしを送りました。しかし、遺影の人たちは、これほど若いうちに戦争の犠牲になったのです。

こうした犠牲の上に、今日の自分たちが平和に生きていく事ができているのだと、改めて追悼の念が湧き上がりました。

あふれる達成感

15日は午前9時から奥武山運動公園で最後の出発式を行い、平和行進のゴール地点である新都心公園を目指しました。

スタート直後から右翼の妨害が繰り返されたので、僕も組合の街宣車に乗り込んで、負けじとシュプレヒコールを行いました。この

2日間の思いを胸に秘め、全てを出し切る気持ち声を張り上げたため、声が枯れてしまいましたが、ゴールした時には達成感でいっぱいでした。

ゴール後、県民大会が行われ、3日間の平和行進を貫徹することができました。

辺野古を訪問

16日は自由行動でしたが、私たちは、以前大阪支部で講演していただいた仲宗根氏の案内で、早朝から辺野古を訪れました。



南大阪平和人権連帯会議

現地学習会に参加して

書記長 林 繁行

5月27日～29日の3日間、南大阪平和人権連帯会議傘下の組合及び組合員15名が、「沖縄現地学習会」に参加しました。

初日の27日、那覇空港から一路、

現地ではまず、なぜ辺野古に新基地がいらないのか、今までの反対運動の経過などを学習しました。

その後、抗議船に乗り、海上から視察をしました。出発して間もなく雨が降りだしたため、予定より短い時間でしたが、撤去が進むフロート、海から見える弾薬庫、そしてカヌー隊にも出会い、お互いにエールを交換しました。

陸に上がった後は、キャンプシュワブゲート前での座り込み行動に参加。私たちは、現地指揮者の山城博治さんから一堂に紹介されました。私はマイクで「沖縄の人び

とだけが闘うのではなく、日本国民みんなで基地反対をしよう」とアピールしました。温かい拍手で自分も励まされ、「みんなが一体となって闘っていくんだ」という思いを強く抱きました。

しっかり発信していく

平和行進はしんどく苦しかったというのが率直な感想です。

しかし、大きな声でシュプレヒコールし、全国の仲間たちと一体感をもって、平和行進を最後まで貫徹できたことは、大きな自信となりました。

今回の沖縄初訪問で、反戦平和の課題は当然のこととして、労働組合運動など、様々な課題に立ち向かい、さらには、自分よりも若い世代に向けてしっかり発信し、一人でも多くの組合員が同じ思い、目標を抱いて前進して行きたいと思っています。

2016年沖縄平和行進は終了しましたが、実際の人びとの平和の行進はこの先永遠に続くので、自分も少しでも力になればと思います。

支部や分会の皆様には、貴重な体験をさせていただき、大変ありがとうございました。

「おもいやり予算」で米軍人やその家族に対しても、手厚い恩恵を施していることに、日米安保協定や日米地位協定に怒りを感じずにはいられませんでした。